

2020年度「教学と現代」報告 「佐藤『元の理』学の世界」
金子 昭

2020年度の「教学と現代」は、テーマを「新型コロナウイルス時代の天理教の教えと実践」として3月28日に開催した。今回はコロナ禍のために初めてYouTube配信という形を取った。

堀内みどり主任の開会挨拶の後、企画担当者として私（金子昭）が趣旨説明を行った。

最初に、天理大学長でもある永尾教昭所長が「一れつきょうだいの教え—天理大学の事例をもとに—」と題して基調講演。昨年（2020年）8月の本学ラグビー部員集団感染問題解決の陣頭に立って取り組んできた体験を踏まえて、人類がみな兄弟姉妹であるという教えを心に治めることの大切さを強調した。

集団感染の発生後、天理大生がアルバイトを断られたり、教育実習の受け入れを拒否されたりする事案が生じ、大学として記者会見を開いた。その結果、市民や卒業生から激励の電話があり、教育実習生も全員受け入れられるようになるなど、状況が変化した。その背景には、新型コロナウイルスという未知なものへの恐怖や心配があったと、永尾所長は指摘。また一方では、「自分が受け入れ先の人の立場だったら」ということも考えた時、相手先を一方的に断罪するべきではなく、事実を丁寧に説明して一緒になって問題解決を進めたいとも述べた。

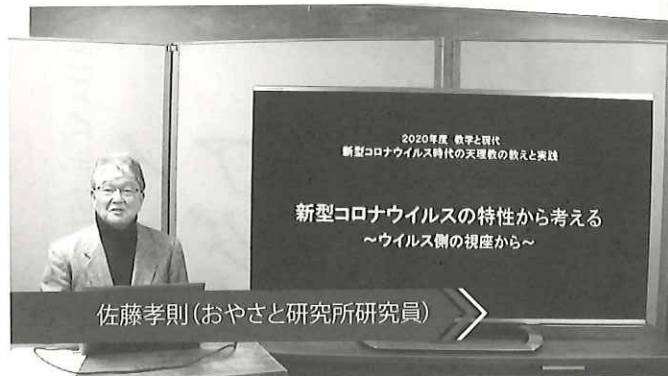
その上で、差別や偏見をなくすためには、「教育の力」に加えて「信仰の力」も必要であると主張。「信仰の力」とは、人間の知恵や力を超えた存在（天理教で言えば親神）への畏敬の念を持つことである。天理教には、人類はみな兄弟姉妹という教えがあり、我々が真にこの教えを体得できたならば、互いの相違を受け入れ、差別や偏見を乗り越えることができると締めくくった。



【永尾教昭所長・基調講演「一れつきょうだいの教え」】

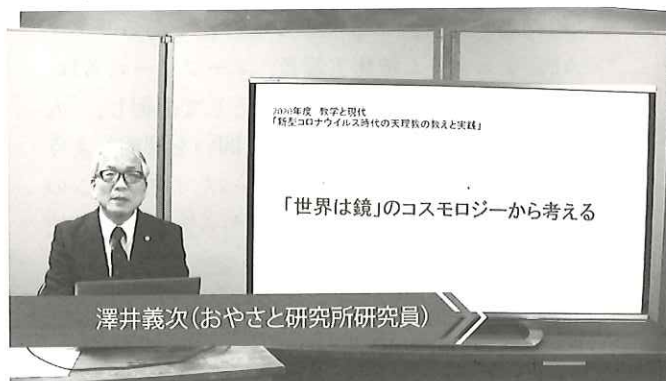
基調講演の後、佐藤孝則研究員が「新型コロナウイルスの特性から考える」と題して、生命科学の視座から発題を行った。佐藤研究員は、新型コロナウイルス感染拡大から1年経ち、ウイルス変異株などの最新情報を踏まえて、感染防止対策が必要であると述べる一方で、ウイルスそのものについての見方を変えるべきことについても主張。ウイルスが「変異」する意図は、自らの命を繋いでいこうとする必死の戦術であって、人類を根絶しようという戦略ではない。そもそもヒトのDNAの8%はウイルスの遺伝子であること、またそのような内在性ウイルスには人体に有益な作用もあることを示した。とくにヒトはウイ

ルスから遺伝子を受け取ったことにより、出産の時の胎盤を獲得し、「をびや許し」を受け取ることができた。このような点を踏まえて、佐藤研究員は、「八千八度の生まれ変わり」の過程における人類とウイルスの共進化について言及した。



【佐藤孝則研究員・発題「新型コロナウイルスの特性」】

引き続き、澤井義次研究員が『「世界は鏡」のコスモロジーから考える』と題して、天理教学の視座から発題を行った。澤井研究員は、親神のご守護の理という視座から捉えれば、人間身の内と世界は、「二つ一つ」の関係において本質的につながり合っていることを指摘。我々人間は親神を「をや」と仰ぐ「一れつ兄弟姉妹」として、互い立て合いたすけ合う関係にある。「世界は鏡」のコスモロジーにおいては、親神が世界に生起する様々な出来事を「鏡」として、我々一人ひとりの心が映されている。それゆえ、新型コロナウイルスの感染拡大を乗り越えるためには、一人ひとりが親神のご守護によって生かされて生きていることの喜びをもって、親神の親心を自らの心に鮮やかに映すことができるよう、自らの心の「鏡」を磨いて心を澄ますことが大切である。さらには、「人をたすける心」になって、親神の思召に適った本来の生き方を身の周りや世界へと映していくことが求められると、澤井研究員は締めくくった。



【澤井義次研究員・発題『「世界は鏡」のコスモロジー』】

最後に、私（金子昭）が総括を述べた。このコロナ禍を終息させる鍵として、科学リテラシーを重視した信仰の重要性、親神の試練を明るく受け取ることの大切さ、そして天理教者の生き方として「優しい心」「人をたすける心」の必要性があると指摘した。このテーマについては、思案していかなければならないことが数多くあるが、今回の講座の内容が視聴者の信仰的思案の参考になることを願っている。

なお、今回の講座は録画配信しているので、おやさと研究所のホームページから視聴できる。